吉本隆明と論敵

松岡祥男

論争家・吉本隆明の資質

吉本隆明は論争家として、つとに有名である。幾多の論争を繰り拡げても、屈したことはいまだ一度たりともない。そこには、思想的な徹底性と非妥協的な姿勢が、際立っている。決して誰かをあてにしたり、多数派工作をしたりすることはない。吉本隆明はいつでも孤軍奮闘なのだ。

しかし、吉本隆明は好戦的な性格でも、望んで論争を仕掛ける目立ちたがりでもない。本人はじぶんを「引っ込み思案」と思っており、「あなたは一言でいうとどんな性格ですか?」というアンケートに「戦闘的受動性」と答えている。これは資質と切実な体験から生まれたものといえるだろう。

吉本隆明の自己の資質へのこだわりは、『心的現象論序説』の中の「夢の解釈」で取り出されている。

子供の〈わたし〉はいつも遊んでいる横丁の露地で近所の遊び仲間の子供と集まっている。なにかとりかえしのつかぬことをみなでしてしまったらしい。仲間の子供たちはつぎつぎに仕方がないからみなで腹を切ろうと叫んでいる。だんだんと仲間の雰囲気は腹を切るという点に集中し高まってきて、もう腹を切ることが当然のような熱気が支配している。ところで〈わたし〉だけは腹を切るのは嫌だとおもっている。とうとうたまりかねた〈わたし〉は、おれは腹を切るのは嫌だと口に出す。すると仲間はそんならお前は勝手にしろ卑怯だと口々に罵って、皆、短刀を出して抜き身をきらめかせる。そこでわたしは嫌々ながら仕方なしに刀を抜いて皆にならった。では腹を切って死のうとたれかがいって刃を腹の方へ向ける。わたしは思い切って腹をつきさした。ところが仲間をみわたすとどうしたことか仲間のたれも刃を腹に刺したものはいない。

ここでは、少年時の夢の事例として挙げられているが、ほんとうは体験的に幾度も繰り返されてきたにちがいない。勿論、吉本隆明の戦争（敗戦）体験の中核にもあるものだ。この

関係の〈異和〉と痛切な体験の内実が、吉本隆明をして論争へ赴かせる〈悲劇〉性なのだ。吉本隆明の論争は、主題でいえば「戦争責任」にはじまり「超資本主義」までにわたり、その論敵は日本共産党から産経新聞まで、花田清輝から柄谷行人までにわたっている。

私はここで、ひとつひとつの論争を取り上げ、詳細にたどり論ずるつもりはない。それをすれば一冊の著書となろう。ここでは論敵となった人物を、ある観点からスケッチしてみたいのだ。私は著者の許諾を得て『吉本隆明資料集』を自家発行している。それは「鼎談・座談会篇」に始まり、現在「初出・拾遺篇」を継続刊行中で、号数でいえば第六三集に達している。この場所から見える論敵たちの姿は、吉本隆明の論争を一面から照射するものと考える。それがここでの視座である。

壺井繁治・岡本潤

吉本は、雑誌『現代詩』一九五五年七月号に「高村光太郎ノート――戦争期について――」を発表し、戦争責任論の口火を切っている。その中で、壺井繁治と岡本潤といった前世代の詩人たちが、戦争中、軍事体制と戦争を翼賛する詩を発表しながら、それを隠蔽し、戦時下さも戦争に抵抗したかのような擬態を示し、戦後「抵抗詩人」として復活を遂げたのに対して、鋭い批判を放ったのである。

殊に壺井は、「指の旅」や「鉄瓶の歌」といった大日本帝国のアジア侵略を翼賛讃美する詩をかきながら、敗戦後、無反省に態度を翻し、破廉恥にも戦争責任を追及する糾弾者へ変貌したのだ。日本共産党傘下新日本文学会の小田切秀雄らの「文学における戦争責任の追及」声明に加わり、平然と他者の戦争責任を追及する「高村光太郎」論を書いている。吉本はおのれの切実な戦争体験に照らして、これを見過ごすことはできなかったのだ。

吉本は、「すぎゆく時代の群像」という鼎談で、壺井の「七つの首」という詩に対する鶴見俊輔の「壺井繁治が詩を書いたんですよ。東條以下の戦犯の首がとぶことを喜ぶ詩なんだ。この野郎と思ったな」という発言をうけて、「ぼくは知っていたんですよ。それで『七つの首』の詩だから、憤慨は鶴見さん以上です」と語っている。

しかし、これは壺井個人の態度の問題に留まるものではなかった。独善的な日本共産党は壺井らを擁護するとともに、逆に、批判者に「反共」のレッテルを張り、批判の封殺を策ったのである。

そして、その後の六〇年安保闘争の過程において、全学連主流派を支持する知識人を次々と「反党分子」と指定し、機関紙で排撃キャンペーンを展開して、批判を葬ることを組織方針としたのだ。これが日本共産党の思想的な体質であり、排他的な組織の本性である。以後、これらの知識人の発言に耳を貸すな、党の批判者の表現は読むな、という組織の指導が徹底

され、現在でも、それが続いている。これを思想的頽廃といわず、何をそういうのか。これは宮本顕治から中野重治、現在の党幹部に至るまで、少しも変わっていない。どんな場合でも人格は組織を超えるはずなのに、党の指導に盲従する党員の中には、党の機関紙しか読まないという姿勢を変えない者も少なくない。痛ましくも滑稽な病態を差出し、自己判断を失った廃疾者の群れという様相を呈して、その裾野を形成しているのだ。

その典型は、組織と陣営に守護された壺井の姿である。壺井はその後も、真摯な批判を正面で受けとめることも、自己批判することもなく、『詩人会議』の代表に居座りつづけたのである。そして「壺井繁治賞」が制定され、その陣営の内部では、壺井はいまでも誉れ高い「抵抗詩人」なのだ。ソビエト連邦の崩壊を持ち出すまでもない。また「自主独立路線」もなにもありはしない。こんな有様では、発展も展開も望みようがなく、一定の組織基盤を持っていても、その思想的な〈死〉は明瞭である。

岡本潤は、壺井とは違っていた。岡本は吉本の批判に対して「プロクレステスの寝台」などの反論は書き、吉本も「前世代の詩人たち」を書いて、これに応じ論戦となった。岡本の反論や自己批判の内実はともあれ、批判をまともに受けとめたことにおいて、壺井よりも遙かに優れている。

この論争に、横から介入したのが花田清輝である。花田は当時日本共産党の主要な文化イデオローグであり、「その後の二人」という意図をもって、岡本・吉本の直接対話の司会役まで買って出たのである。たぶん花田は、日本共産党指導部の宮本顕治・中野重治・蔵原惟人らと『近代文学』に拠った荒正人・平野謙らの間で闘われた第一次「政治と文学」論争の延長線で、その継承者と吉本を見なしていた。それは半ば正解で、半ば大きく外れていた。『近代文学』派は戦前左翼としての自らの「共産党神話」を打ち破ることができず、結局は党官僚に屈服する形で論争は終息した。その前例を踏まえて、花田は吉本の批判を取り込み、陣営に吸収することができると錯覚していたといえる。

ところが、花田を司会役にした岡本と吉本との「芸術運動の今日的課題」は、思わぬ展開を呈した。吉本には、戦前左翼のような「共産党神話」も「同伴意識」もまるでないから、岡本に対して一切妥協しない。これに苛立った花田は自らが設定した役割を放擲し、吉本へ恫喝を加えたのである。花田の誤算は、吉本が生粋の戦中派で、左翼コンプレックスなど微塵もないことを知らなかったことだ。

花田の文化イデオローグとしての工作は、周りに熱狂的な支持者を獲得しながら展開され

たが、花田の大同団結の夢想は実を結ぶことはなかった。なかでも吉本は目障りな存在だったに違いない。それが花田・吉本論争の背景であるといえる。

いまでは、この論争は吉本の圧勝のごとく言いならされているが、その実態は、そんな甘いものではなかったように思える。政治組織をバックにもち、戦中は中野正剛らの東方会に属し、運動経験豊富で、力量も人脈もある花田将軍に対して、まだ駆け出しにすぎなかった若い吉本は苦戦を強いられたはずだ。「戦中ファシストの詭弁」などはかなり崖っぷちという感じもする。しかし、戦争と戦後の亀裂と断層の深さ、孤立的なその歩みから獲得した体験的な確信は揺るぎないものであっただろう。そこが勢力を頼みとする花田とは根本的に違っていた。そして、なによりも花田のつまらないところは、その論理も言説もすべて偏狭な党派性に帰着することだ。

花田は、吉本も参加している「ホーム・ドラマと時代感覚」という映画合評で、映画「子供の眼」の原作者である佐多稲子を擁護して、「佐多さんの原作と映画を混同されては困るからさ。原作も書く上でのいろいろなリミットはあっただろう。『家庭朝日』に書いたわけだからね」と言う。締切に追われたというのなら、それなりに売れている作家なら誰でも条件は同じだ。そんなことまで持ち出して擁護する花田は、単なる身贔屓ならまだしも、あくまでも左翼だから、同じ陣営だからという党派性が狐のように憑いて離れないのだ。この発

言は、そのさもしい了見の現われである。徹頭徹尾、これなのだ。

吉本もこの論争で鍛えられ、多くのものを得、そして失ったはずである。そのひとつに全学連初代委員長で、『文学者の戦争責任』の共著者であり、また『現代批評』の同人であった武井昭夫との訣別があった。六〇年安保闘争が決定的な時代の分岐点となり、残存していた協調的なムードは完全に払底した。その中で、武井は花田側近に移行した。吉本は三人の優れたオルガナイザーとして、谷川雁、ブント書記長だった島成郎、それに武井を挙げている。

武井はその後、日本共産党からパージされた『新日本文学』に拠り、『現代批評』の同人だった奥野健男の『文学は可能か』などを標的に、先頭に立って集中砲火を浴びせた。これに対して、吉本は「戦後思想の価値転換とは何か」などで武井らを批判し、第二次「政治と文学」論争になった。しかし、もうこの段階では、吉本は『言語にとって美とはなにか』をほぼ完成させており、花田の社会主義リアリズム論も、それに依拠した武井らの文化運動も、完璧に理論的破産を宣告されていたのである。

武井はいまだにPR誌『未来』などで、吉本には『近代文学』派や鮎川信夫ら詩人たちの支援者がおり、それに比して花田は孤立していたから、自分は見かねて花田側に着いたなどと語り、状況の客観性をすり替え、時代の実相を改竄して、事情に通じない後続の世代をたぶらかしている。しかし、そんなことをしても無駄なのだ。そんなことで、吉本の仕事の構

紫性と脱構紫性は微動だにするはずがなく、ただの負け犬の遠吠えにしかなっていないのである。

『近代文学』

『近代文学』七人衆は、小田切秀雄は元来日本共産党との二足草鞋であり、その党崇拝体質から『近代文学』から実質的に離れ、佐々木基一も花田と組み、芸術大衆化路線へ移行することによって去ったようにみえる。だから『近代文学』のほんとうの同人は残る五人ではないだろうか。

吉本にもっとも好意的だったのは平野謙である。それは同席した幾つかの座談会での発言にも窺える。平野は「平批評家」を自称し、持前の粘り強い批評姿勢と懐疑精神を失っておらず、また戦前左翼としての限界に半ば自覚的であったといえる。だから、逆に後続世代に身を開いていたといえよう。吉本にとっても、平野の「政治と文学」論を克服することは避けられない課題だった。「左翼文学」という座談会で、平野と花田とが論争になったとき、平野の論旨がまっとうに通じるように、吉本は補足する発言をしている。

平野謙に比すると、埴谷雄高は遥かに老獪であり、闇の司祭にふさわしく、革マルの黒田寛一から小田切秀雄までを許容し、包括するような態度を最後まで崩すことはなかった。こ

れは懐が深いというよりも、思想にも人格にも、決定的な訣別の地点があるという現実性を曖昧にすることであり、その孤高性とは裏腹に政治的な懐柔策に長けていたというべきである。

吉本は、『認識の皮膚』という埴谷の著書の帯文で、埴谷に瞋られたと感じたことが二度あると記している。一度はサド裁判の法廷で、もう一度は座談会の席上で。その座談会とは「批評の誕生」に違いない。その座談会は、一九五九年に『近代文学』誌上で行われたもので、『批評』や『現代芸術』や『現代批評』などの当時の同人雑誌の面々が顔を揃えて、自分たちの立場や主張を語り合うという企画である。吉本は『現代批評』を代表する形で出席している。埴谷は、吉本が当然その場で積極的に発言し、自分たちの立場を鮮明に打ち出し、他を圧倒することを期待していたようにみえる。ところが、吉本は埴谷の意に反して、あまり発言せず、自分は自分を代表するだけで、同人個々はそれぞれであり、強いて何かを言い張る必要はないから、控えめな態度に終始している。これに対して、思い通りに振舞わない吉本に対して、埴谷は「言葉で瞋るのではなく、不意に生身の皮膚が露出」するように不満を示したものと思われる。思想は劇の演出ではないのだ。他者を思惑通りに動かそうとする発想自体が、支配の論理なのだ。後年の吉本との論争で、他人の家の照明器具から服装までに難癖をつけ、その俗悪な理念の本性を露呈したのだ。

しかし、『近代文学』五人のうちで、もっとも始末に悪いのは本多秋五だと思う。本多は

「白樺」派の懐手をした余裕ある傍観者の論理を身に纏っており、一見温厚にみえても、その核心は達観的な優越性に支配されている。例えば「戦争責任を語る」という大座談会で、村会議員でもある杉浦明平を「あんたなんか、非常に申分のないそういう社会的意義のある、作家活動をしているから」とくだらない事で持ち上げ、いろんな意見が出た、結びに「僕、結論じゃないんだ。また振出しになっちゃう。文学論として正しいということと、美しいということは別だということとそれで終りです」と本多は言う。何が「それで終り」なのか、さっぱりわからない。元の木阿彌に差し戻す発言なのだ。本多の中には転倒した「人道主義」がはびこっており、自分はいつでも正しいのだという態度が、発言の端々に見え隠れしている。それは他の座談会においても変わることはない。

吉本は、本多の「人類学的等価」という、わけのわからない概念と言い分をめぐって論争をやっている。だが、その論争に自己を賭けることも、論争を通じて時代の現場へ踏み込み泥まみれになることも、初めから忌避している本多を相手にしても、実りある論戦となるはずはなかった。

トーベ・ヤンソン『ムーミン』の訳者という以外、山室静のことは殆ど知らない。また荒正人については、自分の手がけた『漱石全集』の「年譜」に誤植があったのに怒り、編集部員を呼び寄せ土下座させたという逸話ひとつで、言うことはない。

こう、けなしたからといって、『近代文学』を侮るつもりは少しもない。『近代文学』派は、詩の『荒地』派とともに、戦後文学の新たな地平を切り開いた先駆的な存在なのだ。その業績を抜きに、その後の展開はありえないのだから。また、それぞれが弾力性のある本質的な存在なら、ここでの批判など私の貧しさを反映した、皮相な一面にすぎないだろう。

大江健三郎・江藤淳

大江。このノーベル文学賞受賞作家は、戦後文学の継承者であることを自認して憚らない。そして、先の受賞者である川端康成を反動的な伝統主義者と貶めることを忘れない。大江の作品と川端の作品を読み較べてみれば、そんな立場や価値観で片がつくはずがないことは誰でもわかることだ。

大江は、東京大学の学生からそのまま作家生活に移行した。この作家は、ほんとうの意味で、社会の地面を自分の足で歩いた経験も、巷の風に吹かれたこともなく、その環界は「東大」という特権的な温室でしかない。またそこで培養された偏奇な感性を一度も相対化したこともないようにみえる。べつに温室育ちだからといって非難する謂れはないのだが、大江の場合、『源氏物語』の作者が、専制君主の近辺しか知らず、その堂上のみやびな簾ごしに覗かれた「庶民」の世界を、獣のような賤しい者達の下界とみなし、「地方」を隔絶された

異類の棲む他界のように畏怖したのと同じような、〈感性の同型性〉をもっているからだ。

大江は、日高六郎のようないつでも無原則的に変身を遂げるエセ知識人に啓蒙されて、ヒロシマや原爆文学に入れあげて、叡智のかけらもないような言説を繰り返し、その神話化に寄与している。原爆ドームなどのどこが「平和のシンボル」なのだ。ただの歴史の残骸にすぎない。あんなものを後生大事にする謂れはどこにもないのだ。核兵器の廃絶という課題も、犠牲者の魂を救抜する方途も、太平洋戦争で圧倒的優位にありながら核爆弾を使用したアメリカの軍事的暴挙の犯罪性も、その彼方に厳然と存在するものだ。この主題が大江の聖なる神殿なのだ。その暗幕の陰から覗かれる世間がどう映っているかは、息子がプールで溺れているのにブレイクの詩を口ずさむ作品の場面や、自分がノーベル文学賞を獲得することは障害のある息子のためだと短絡するところに、象徴されている。

吉本は大江の『ヒロシマ・ノート』を痛烈に批判している。また「戦後思想の断面」という座談会で同席しているが、そこで論議を交えた痕跡は認められない。だが、吉本が、アメリカの核配備を非難しても、ソ連の核保有について全く触れない半端な「反核運動」に対して、敢然と異論を展開したとき、大江は、吉本の言説はミシェル・フーコーなどの受け売りであるとデマゴギーをふりまき、広島の反核集会では吉本を指して「真の敵が明らかになった」と演説をぶったと言われている。この「核」患者は、死が日のうちに紛れたものである

ように、核の脅威も、人々の生活に外在することを知らないのだ。そんなことばかり考えていたら、ノイローゼになってしまうだろう。

その大江の宿敵は江藤淳である。大江は江藤の自殺に関しても、脳梗塞くらいで自殺するのはおかしい、世の中にはもっと重い病気を抱えて苦しんでいるものもいると、驚くべき因縁をつけている。私にはそんな事をいう、大江の神経がわからない。

江藤は、吉本と幾度も対談している。江藤の立場が保守的であったということが問題なのではない。ただ、それが時に世俗の通念に流れたところだ。例えば角川選書版の『作家は行動する』という画期的な文学論の序文で、吉本の『言語にとって美とはなにか』は決定論に毒されており自分の作品の方が優れていると書き付けたり、また吉本を「プロレタリア文学の戦後の一継承者」と位置づけたり、吉本の戦争責任論を「依然として地方検事」と言ったりする才ばしった、その体軀のような度量の狭さだった。

のちに、その評言はそっくりそのままわが身にはね返ることになった。『昭和の文人たち』で青春前期に同化模倣したとおもわれる、堀辰雄の出世の欺瞞を暴きたて、江藤の処女作である『夏目漱石』に跋文を寄せた、平野謙の戦中と戦後の態度の落差を摘発する、検察官の役割を果すことになった。その仕事が悪いとは思わないが、円熟に達したものの論としてはむきになりすぎていて、逆に自身を痩せた倫理主義者に見せていた。

江藤は「現代文学の倫理」という吉本との対談で、戦後憲法の成立過程とアメリカ占領軍の政策の再検討に乗りだし、日本の「無条件降伏」に異議を提起し、尖鋭な論陣を張っていた。その中の対談ということもあって、吉本にあなたはラジカルさが不足しているなどと言うが、吉本は少し引いた形で懇切に受け答えしている。江藤は図に乗り、さらに言い募る。しかし、吉本が最後に「『あの人』（昭和天皇―筆者註）より先には死なんぞ、と思っているわけですよ。それはぼくら戦中派の何か怨念みたいなもので」と言うと、この吉本の重い本音に、江藤は怯み、対談をさわりのないように収めている。江藤には資質の暗い根があり、それは学校をずる休みし、押入れに隠れ潜んで谷崎潤一郎を読み耽った体験から発酵するようなものだった。それと社会的な自画像とが乖離するところに、その虚ろな功名心が露出した。それは『正論』みたいなくだらない傾向雑誌に、それらしく収まってしまうところに如実に現われていた。

こうは言っても、大江の『死者の奢り』を始めとする初期作品の衝撃や、江藤の『成熟と喪失』や『漱石とその時代』の第一部や第二部などの充実した仕事を忘れることはできない。

柄谷行人・浅田彰

柄谷行人の決定的な駄目さがどこにあるかは、はっきりしている。その言説の評価以前に、

吉本が『マス・イメージ論』で社会の変容を根底的に捉えようとしたとき、六〇年代に皇族を揶揄する匿名記事を掲載し、それに対する右翼の抗議と恫喝に、まっとうに対応することもなく平伏したことのある『日本読書新聞』が、反吉本の編集意図のもとに『マス・イメージ論』の批判を特集した。これに柄谷も加わった。このとき、この男は信用できないと、私は思った。反吉本の立場に立とうが、『マス・イメージ論』を批判しようが、そんなことは〈自由〉だ。だが、これは違う。これは意図された、個人への不当な集中攻撃であり、言論の圧殺行為なのだ。それに加担するということは、〈組織的な抹殺〉や〈集団的なリンチ〉を許容することであり、また、自らもそれを主宰しうることを物語っている。ここでは、どんな釈明も通用しない。ましてや、時代の地の水脈は、連合赤軍のリンチ粛清や革共同両派の殺し合いの党派闘争を経験してきているのであり、「収容所群島」も世界的に明らかになっていたのだ。その思想的な課題を引き寄せもせず、およそ〈思索者〉とは思えぬ、時代への洞察も、自らの言説的な自立性も持たない、迎合的な徒党体質を白日のもとに晒したのである。柄谷がその後、「単独者」というキイ・ワードを繰り出したとき、その犯罪性と恥知らずぶりに、私は呆れた。どこが「単独者」だ。そんな高尚ぶった虚偽のポーズをとるまえに、じぶんの行為を内省すべきなのだ。

柄谷は現在でも、少しも変っていない。『週刊金曜日』の創刊編集同人に名を連ね、すぐ

離れるなど、野合と離散を繰り返している。また大学インテリ左翼の一部を集め、井上ひさしの『吉里吉里人』なみに代表は籤引きで決めるなどと戯けたことをぬかして、なんのことはない、ボス猿に納まりたいだけなのだ。そんな大衆や外部としての他者を繰り込まない組織や運動が、この高度資本主義の情況に通用するはずがない。バカな奴だ。

「戦後文学の党派性」をめぐる、埴谷らと江藤や柄谷らの論争の時に、柄谷は花田清輝の再評価などを口走ったりせず、それを突破する方位を目指すべきだったのだ。柄谷は自分に欠落しているものを、中上健次に見ていたに違いない。しかし、肝心の中上のハートはつかむことはできなかった。それをつかんでいるなら、知的な徒党を率いて、権威づけに躍起になるような真似はしないはずだ。和歌山の海、熊野の深い山、トーテムの違いから発生したような疎外された被差別部落の人々の心情、それらが交錯し、歴史の地勢と古層の地霊が交響する、そんな中上の魂を包んだものを、柄谷は〈共有〉することはなかった。ただ中上の持つ知的劣等感や俗物性、その脆弱さを、補完するポジションにあっただけである。柄谷は私のような貧乏浪人の批判は無視するだろう。この「教授」は、そうやって延命してきたのだから。

浅田彰の『構造と力』は、受験世代の秀才らしく、コンパクトに現代思想の先端をチャートするものだった。体験の重みも、個と社会との軋轢も、顧慮することのない身軽なその時

代背景にフィットし、私などよりも下の世代に迎えられた。

それが柄谷などと組み、吉本の敵となったのである。しかし、その小利口さとセコさは、吉本の娘ということだけで、よしもとばななを貶したところに端的に現われた。浅田はよしもとばななの作品を、少女マンガの影響下に、それを「単にタテに直して、それに甘ったるい落ちをつけただけだ」とけなし、こんなものは「とても生き残れないよ」と断じた。怯懦なる精神とはこれをいうのだ。浅田の徒党的な利害から発するケチつけが、全く的外れの矮小な悪意にすぎないことは、よしもとばななが世界的に作家として認められる過程で証明されている。だいたい「親」と「子」は社会的には別個の存在だ。それをコミにしたり、代理的に標的すること自体が浅ましいのだ。浅田に限らず、数多くの左翼や業界の頽廃分子がそれをやった。それはこの連中が頬被りし、素知らぬふりをしても、決して抹消することはできないものだ。この徒党的な習性はスターリン主義の特産物である。さまざまなデマを捏造し、流布し、それに酔い痴れ踊る輩は後を絶たない。最低の連中なのだ。

浅田が少女マンガを見下そうと、大島弓子や萩尾望都や高野文子などの作品的達成によって、世に揺るぎない地歩を獲得している。そんなことは浅田にも解っているはずだ。折角、負い目のない世代として出立しながら、またぞろ腐臭の底無し沼にはまったのだ。

その他

紙数が尽きてきた。ここまで幾多の論敵を逸している。

吉本の論文とそれへの批判が同時掲載されるという編集ルール破りに端を発した、岡井隆との短歌をめぐる論争、これはとても有意義な論争で、両者ともこの経験を糧とし、以降三回対談を行い、それぞれの仕事に敬意をもって競っているようにみえる。

丸山真男、鶴見俊輔、六〇年安保闘争の方向性をめぐる竹内好、安保後の黒田寛一及び革共同両派、部落解放同盟や「言葉狩り」の連中、鮎川信夫との決裂など、吉本の格闘は途切れることなく続いている。

また、およそ宗教の内在性を知る者とは思えぬタダモノ宗教学者田川建三などを始め、多くのアンチ吉本論も刊行されている。田川は吉本の『共同幻想論』が皆目わからない。この男は、人が野辺の小さな無縁塚を祈っていたら、そこに石塊しか認めることができない、酷薄の徒なのだ。

私がかなり好きだった村上春樹だって、オウム真理教の地下鉄サリン事件の被害者にインタビューした『アンダーグラウンド』で、『産経新聞』の世論操作による吉本バッシングを容認するように「大方は世論の袋叩きにあった」と書き、「それらの論の多くは少なくとも

部分的に正論ではあったが、場合によっては言い方がいくぶん偉そうで啓蒙的だった」と名も挙げずに批判した。勿論、吉本は「どちら側でもない」という評論を書いて、これに反論した。だが村上は、編集者の安原顕が作家の生原稿を売り払った一件で、またしても「あの＊＊＊＊（高名な批評家）さえ」自分の書いた小説を誉めたと安原が語った、と書き付けたのである。これは伏字にしていても、吉本を指していることは分るものには分る筆法だ。匿名による攻撃が卑劣なように、相手を名指さない村上の遣り口も卑怯なものである。名指しにする度胸も、そのリスクを負う覚悟もないなら、こんなこと（安原の法螺話）を持ち出す〈必然〉はないはずだ。そこに〈作為〉が垣間見えるといっていい。吉本の本格的達成のひとつである『母型論』の原稿も売られているのだ。さも自分だけが被害者のような貌をし、殆ど関わりのない他者を踏みつけて、「良い子」ぶるのはやめるがいい。この通俗性が村上春樹の最大の欠点なのだ。これは当然、作品にも潜在している。

ここでの評言が、吉本隆明への同化作用の強すぎるものだとしても、私はこの全てに責任を持つことができる。そして最後に付言すれば、何ひとつ質しも確かめもせず、『吉本隆明資料集』の発行を「吉本隆明の名前を騙る」「商行為」などと、出鱈目な中傷をばらまいた北川透。そのケチな根性は直らないだろうが、黙んまりで、この犯行事実から逃走できると思ったら大間違いなのだ。